

○ 日本側所蔵記録

資料番号	J. III-7	資料名	金明国筆 拾得図
			<p>1636年及び1643年の二度にわたって朝鮮通信使の画員として来日した金明国の作品。中国の伝説的な僧侶である拾得を描く。これに後年、日本の僧侶が着賛していることから、金の来日中の作品であり、日本の僧侶に学問的な影響を与えたものであることがわかる。</p> <p>金は、人物や神仙を画くことを得意とした、朝鮮国を代表する画家であり、豪放磊落な性格で酒を好み、酔うままに筆を執り、速筆で名画を描いたと伝わる。自らを酔翁と称した。</p> <p>朝鮮通信使に随行した最も優れた画家の作品であることに加え、日本に遺された作品を通じた日朝間の学術交流を証するものである。</p>
掛幅装 紙本墨書 [縦×横] 64.5×52.8cm			

資料番号	J. III-8	資料名	波田嵩山朝鮮通信使唱酬詩並筆語
・南玉詩書 紙本墨書 [縦×横] 38.5×54.2cm		・成大中筆語 紙本墨書 [縦×横] 38.5×54.8cm	

1763～64年使行の朝鮮通信使随員の製述官南玉(秋月)、正使書記成大中(龍淵)、副使書記元重挙(玄川)が下関の阿弥陀寺において、長州藩儒学者の波田崇山と学術交流した際の詩と筆語で、波田家に伝わっている。南玉2点、成大中1点、元重挙3点の計6点が遺る。

日本と韓国は言語は異なるものの、漢詩と漢文という文体と文字を共有しており、学者間では筆談での意思疎通が可能であった。そのため、通信使随員の学者と日本の学者との間で盛んに学術交流が行われた。特に長州藩では、1711年の使行から藩命による学術交流が行われており、使行のたびに多くの学者が下関に出張した。波田崇山もそのうちの一人であり、その学才を通信使随員から激賞されている。朝鮮通信使を介して、両国の学術交流が盛んに行われていたことを裏付けるものである。